

第12回大会報告

第12回大会・総会は2007年3月3・4日の両日に亘り、新たにスポーツ・健康科学部を開設して2年目となる大東文化大学東松山キャンパスで開催されました。両日とも大会実行委員長の田中博史氏（大東文化大学）の司会進行のもと、大学挙げての応援を受けて大会は大成功を収めました。また当日は3月初旬とは思われないほどの暖かい好天に恵まれ、新しくて綺麗な会場で熱心な討論が繰り広げられました。

第一日目は青葉昌幸大東文化大学スポーツ・健康科学部長と矢島忠明学会会長の挨拶で始まり、前半はアリーナにおいて「小学生のバレーボール指導」が行われました。講師の的確な指導もさることながら、熱心にボールを追う小学生の姿に参加者は見入っていました。後半はフォーラムA・Bが2会場に別れて開催されました。両会場とも討論が白熱して時間をオーバーし、予定よりも30分遅れて18時から生協食堂において懇親会が催され、大いに盛り上がりました。

第二日目午前の部は「次世代選手の育成」をテーマとしたシンポジウムから始まり、昼には総会が開催され、さらに午後の部では一般研究発表（11題）・フリーディスカッションと盛り沢山の内容となり、活気溢れた素晴らしい学会大会・総会を終了することができました。大会実行委員長の田中博史氏の多大なご尽力に感謝申し上げますとともに、大東文化大学の関係各位に厚く御礼申し上げます。なお、大会参加者は約160名（モデルチーム含む）でした。

（編集委員 河合学）

オンコートレクチャー

オンコートレクチャーは高橋宏文氏の司会により進められました。講師は並木ジュニアクラブで13年間に渡って小学生にバレーボールを指導している川田公仁氏です。コート上での解説にはシンポジウムで話された内容が多く含まれていますので、ここでは実際に行った指導を中心としてまとめていきます。モデルチームには並木ジュニアチームをはじめ、3チームの小学生女子選手が協力してくれました。

小学生のバレーボール指導

川田 公仁
（つくば国際大学）

子供たちの持つ「遊び好き」「飽きっぽい」「楽しい」

でのびる」という特性を踏まえて、私は常に次の3項目を基本として指導の展開を考えています。特に遊びの中から「できた」という感覚を掴むことが小学生にとっては重要です。

- ①基本動作を身に付けさせる
- ②1つの練習を短くし、変化を加えて多くの練習をする
- ③ミニゲームとして目標を設定し、多くの挑戦場面を作る

準備運動は楽しく反応よく実施させます。まずはランニングで軽く身体を動かした後、指導者の笛の数でその人数にグルーピングしたり、ジャンケンゲームをしながらゲーム感覚で身体をほぐしていきます。

キャッチボールは2人組で行いますが、この時ももたもたしないで機敏に行動させます。右手で投げる時は左脚の前に出す指導が大切で、逆も行います。その他、両手でスローイングしたり、それをジャンプして行ったりします。またレシーブ姿勢の基礎として、転がって来るボールを、





両手を背中側に回して股の間でキャッチする練習もします。

アンダーハンドパスは、まず上半身づくりとして、お尻を引いて背中に傾斜を持たせることと、脇を広げて目の前でボールを受けるようにします。具体的には、顎と肩をくっつけて、ボールと目の距離をなるべく近づけます。ボールを投げて左右に動かすパスの場合は、上体が崩れないように注意します。また、重心移動によってパスすることを覚えるために、脇にボールを挟んだまま脇角度を固定させて、押し出すようなパス練習もします。ミニゲームとしては、膝を深く曲げて10秒間の2人組の連続パス回数を競ったり、サーブレシーブにつなげるためにネット下で小刻みにサイドステップしながら連続パスで移動して回数を競ったりします。

スパイクは、ボールをとらえる位置の確認から入ります。2人組で一人がボールを両手で掲げ、それを立ったまま打つ練習をします。この時注意するのは、ボールをヒットした時に腕が伸びていること、腕が顎の位置まで前にあること、そしてパチンと音がすることです。また構えの段階では、肘を頭の上で90°曲げてから打たせたり、手の甲を頭につけて肘を後方へ引いた構えから打たせます。それによってスイングにおける肩、肘、指先の使い方を覚えます。ミニゲームとしては、1本ずつの対人レシーブ（アタック-レシーブ-キャッチ）を時間内に何回できるかを競ったり、周辺視を鍛えるために、打つ直前にレシーバーの出すジャンケンを読み取ることもします。

レシーブは様々な練習方法があるのですが、片腕立てからもう一方の腕を伸ばし（逆側の足を前に出して構える）、そのままボールを追って前方へ床を滑る、いわゆるスライディングのような練習を行います。また一般的な左右に動いて1本ずつレシーブする方法も取り入れます。対人だけでなくコーチがボールを打つ場面も多いのですが、その際はコーチにヘソを向けてレシーブするように注意します。

アンダーでのトスの上げ方の方法として、一般的にはトスを上げる方向に身体を向けるように指示するものですが、練習の一つとしてボールの飛んできた方向に身体を向



けたままトスを上げることもしています。ただしオーバーでのトスの場合は上げたい方向に身体を向けさせた上で、両手で器の形を作って目の高さでボールを弾くように指導しています。

その他にも「つなぎ」の練習や「壁ゲーム」などを紹介したかったのですが、時間の関係でお見せできないのが残念です。

Q1：今回は女子だったが、男子の指導で注意することは？

A：男子は指導したことがないのですが、筋力や反応の違いから送りだすボールのスピードが上がると思います。

Q2：練習で怒ることはあるか？

A：設定してある目標がありますが、そこへ到達するためのステップの手を抜いた時には怒鳴ることがあります。

Q3：面の設定が多かったが、足の形（さばき方）の注意はするか？

A：オーバーパスでは言いませんでしたが、アンダーパスではステップに細かい注意を与えます。特にサイドステップに関してです。

Q4：日本の小学生バレーのレベルは高いのか。また、このままで良いと思うか？

A：私としてはもっとレベルが低くてもいいように思います。強いチームの選手はバレーボールを「楽しんで」いないのではないのでしょうか。小学生にとっては楽しんで取り組める環境が必要だと思います。

（記録：河合学）

フォーラム A

フォーラム A は布村忠弘氏がコーディネーターとなり、佐藤政宏氏に講演をしていただきました。傷害を予防するために行われているストレッチを代表とする運動は受動的なものが多いのですが、受動的傷害予防は機能不全を招きかねないとして、能動的ストレッチについてその必要性と実施方法について講演が行われました。

ジュニア期におけるスポーツ障害の予防と治療

佐藤 政宏

(株式会社クレーマージャパン)

スポーツをする上で、傷害のない身体は高いパフォーマンスを発揮する可能性があります。怪我をするということもパフォーマンスの結果です。その怪我を負う場合、怪我し易い時間帯は、活動の初期と終了間際です。したがって、競技をする際にもウォームアップや基礎体力は怪我の予防という観点から重要な要因であると考えられます。

一般的に、スポーツをする際には競技レベルに見合った筋力が必要ですが、怪我の要因には①筋持久力、②筋力、③柔軟性、④身体の使い方、⑤ウォームアップの量と質（動と静）、⑥遠心性収縮を円滑に制御することなどが不十分であることが考えられます。したがって、パフォーマンスの追求を図る上でも、怪我を予防する上でも、同様の要因が関わっているといえます。また、スポーツ傷害予防には、能動的傷害予防と受動的傷害予防があり、それぞれ長所が異なる事から（図1参照）、これらを上手く組み合わせた予防策を図ることが重要です。

傷害の予防としてウォームアップが重要であるのは周知の事実ですが、その目的として、①筋温の上昇、②柔軟性の拡大、③心拍数の上昇、④動作の予行、⑤精神的準備などが挙げられます。ウォームアップで体温を上昇させることはよく言われることですが、特に筋温の上昇は、筋中のカルシウムイオンが上昇し、筋の収縮がスムーズになるという効果があります。こうした目的を達成するためのウォームアップの運動にストレッチが含まれますが、ストレッチには、随意的な（＝能動的）自動運動と不随意的な（＝受動的）他動運動という運動形態があります。しかし、上記したようにそれぞれの運動に特徴があることから、ウォームアップを行う際には、自動運動から始め他動運動へ動作形態を変えながら進める事が重要となり、このように組み合わせた運動を行なうことで、ウォームアップの目的をストレッチングにより達成することができるようになります。

Q1：ウォームアップの強度の目安は何か？

A：競技特性によるが、筋温は37℃を目安に上げ、1回は本運動で達する心拍数に上げることが必要です。

Q2：ジュニア世代のウォームアップ運動はどこまで正

	能動的	受動的
効果が現れるまで	△	◎
効果の持続性	◎	△
機能	◎	×
パフォーマンス	◎	×

図1 能動的、受動的傷害予防の特徴

確に動作させるべきか？

A：解剖学的に、可動域を超えないことに注意して行なうことが必要でしょう。

Q3：中学生男子のストレッチの留意点は何か？

A：身体について考える事も重要ですが、中学生という成熟していないプレーヤーの場合には特にメンタル面の準備をすることが重要でしょう。

Q4：ピラーエクササイズにおいて漸進性は何を基準にすれば良いか？

A：時間や種目を変えることで対応します。時間については、体勢が崩れない範囲で、1min. × 3set で一度に3種目を行う事を目安にすると良いでしょう。そして、一つの動きが高まってきたら次の動きへ変化させていきます。

Q5：バレーボールの動的準備に良い運動は何か？

A：特に傷害、障害の多い肩関節に関係する運動を行なうことが必要で、肩回し運動や肩甲骨の運動を十分に行なうことが重要です。

(記録：高橋宏文)

フォーラムB

フォーラムBは久保玄次氏（大東文化大学）がコーディネーターとなり、森浩寿氏に講演をしていただきました。ここでは講師が提出した抄録に、講演内容に合わせて文章を書き加えたものを掲載します。

ジュニアの指導現場におけるリスクマネジメント

森 浩寿

(大東文化大学)

はじめに

リスクマネジメントとは、組織がその使命や理念を達成するために、その資産や活動に及ぼすリスクの影響からもっとも費用効率よく組織を守るためのプロセスのことをいいます。現在ではさまざまな分野、場面で使われていて、



スポーツのゲームにおいても、防御に関連する組織的なプレーを「リスクマネジメント」と呼ぶ人がいます。

スポーツにおけるリスクマネジメントの手法としては、第1にリスクの把握（想定、予見）、第2にリスクの分析（原因究明）、第3にリスクへの対応（救急措置・事後処理）、そして第4に対応に対する評価（再発予防）となります。

ジュニア指導におけるリスク

バレーボールに限らず、スポーツのジュニア指導におけるリスクには、大別すると、いわゆる「子どもの人権」侵害問題と事故問題（法的責任）があり、後者が中心となります。

1989年の国連総会で採択された「子どもの権利条約」（日本政府訳は「児童の権利条約」）は、子どもに大人と同じ人間としての存在価値を認め、人権の主体として一人の人間としての尊厳を保障すること、とはいえ子どもは子どもであり、子どもが生まれながらにして持つ権利、大人社会の中で保護される権利を保障すること、などを謳っています。子どものスポーツ活動に関連する項目として、第2条（差別の禁止）、第6条（生命への権利、生存・発達の確保）、第12条（子どもの意見の尊重）、第24条（健康・医療への権利）、第28条（教育への権利）、第29条（教育の目的）、第31条（休息・余暇、遊び、文化的・芸術的生活への参加）などが規定されています。すなわち現状としては子どもを一人の人間として見る、ということが抜けているのです。

子どもの発達の領域を身体的発達、精神的発達、道徳的発達、社会的発達と考えるならば、そのいずれの領域においてもスポーツの効果が期待されることに疑いはありません。しかし、取り組み方を間違えれば、それがマイナスの要因ともなり得ます。

子どもは、人格の十分な発達のために不可欠な体育・スポーツの機会についての基本的な権利を持っていて（ユネスコ「体育・スポーツに関する国際憲章」第1条）、具体的には、子どもは、健康的に身体を発育発達させる権利、健全な精神を発育発達させる権利、適切な道徳観を発育発達させる権利、十分な社会性を発育発達させる権利を持っていて、効果的な権利行使のために、スポーツに参加することを誰にも妨害されないと解することができます。したがって、勝つことがすべてという勝利至上主義や「普及」を名目とした無理な競技運営、あるいは体罰、しごき、バーンアウト、ドロップアウト、オーバーユースといった問題は、子どものスポーツ権の侵害であり、次世代選手の育成にとっても危険因子となります。

次に、事故の問題について他のスポーツと比較した場合、バレーボールはそれほど危険性が高いとはいえませんが、スポーツである以上、重大な事故が発生する危険性は少なくありません。種目特有の事故もあれば、最近では熱中症や心臓系の疾患による突然死が、種目に関わらず発生しています。重大事故が発生した場合には、法的責任が発生す

ることもあります。

指導者の法的責任

スポーツ事故における法的責任には、一般的に民事責任と刑事責任があります。民事は損害賠償責任であり、刑事は犯罪行為（警察が介入）にあたるかどうかという違いがあります。

まず民事責任に関して、わが国の法制度では、故意・過失による加害行為を根拠に被害者が加害者に対して損害の賠償を求めるのが一般的です（民法709条、不法行為）。ただし、加害者に財力がなければ被害者が救済されないおそれがあるので、使用者責任（民法715条）もあわせて請求することが多くみられます。スポーツ事故を巡っては、指導者側の損害賠償責任が問われることが多いのですが、指導者だけでなく加害当事者、団体（学校、クラブほか）、大会主催者など、当該スポーツ活動に関わるすべての人が責任主体となる可能性があります。特に、最近ではスポーツサービスを提供する側と受ける側の間を契約関係と捉えて、事故が発生した場合に債務不履行責任（民法415条）に基づく安全配慮義務違反が問われることがあります。この場合、現場の指導者は団体や使用者の履行補助者とされ、団体・使用者に賠償責任が発生します。したがって、事故の問題は単に指導者個人の問題ではなく、組織全体で取り組まなければいけません。事故が起こってから「思いもよらなかった」は通用しません。過失行為（原因）と損害の発生（結果）の因果関係は、指導を受ける者の属性的要因（年齢、技術、経験など）、種目の危険度、状況的要因（天候、場所など）、指導者の施した指導内容や水準などが判断材料となるため、指導者は十分な配慮が必要となります。また一般的に、指導者の注意義務と参加者の技術レベルは反比例の関係にあるといわれ、レベルが低いほど指導者の責任は大きくなります。

刑事責任については、民事責任と比べると決して多くありませんが、近年では熱中症による死亡事故で指導者の刑事責任が問われるケースが増えてきています。実際に指導者が問われる刑事責任は、仕事だけでなく全ての行為に当てはまる業務上過失致死傷等（刑法211条）が多いのですが、しごき・体罰などでは傷害罪（刑法204条）、セクハラ関係では強制わいせつ罪（刑法176条）などが問われます。

保険加入の必要性

一般的に、スポーツ活動が対象となる保険には、傷害保険と賠償責任保険があります。傷害保険とは、被保険者が急激かつ偶然な外来のでき事により身体に損害を被った場合に、損害の程度に応じて保険金が支払われるものです。賠償責任保険とは、被保険者が法律上の損害賠償責任を負った場合に、被保険者に代わって保険者が被害者に対して保険金を支払うものです。

保険に加入しているからといって、必ずしも保険金が支払われるとは限りません。保険のさまざまな条件については約款などに記載されていますが、補償の対象、範囲などについて正確に理解する必要があります。被害者救済、訴訟回避のためにも保険の加入は、スポーツにおけるリスクマネジメントの重要な部分となっています。

Q1: “しごき”は日本独自のものなのか？

A: スポーツが市民権を得てくると、名声を得るために“しごき”に走る指導者が欧米にも見られました。しかし“しごき”はあっても、体罰は少なかったようです。

Q2: 狭い体育館の場合、危険防止のために、壁際に飛んだボールは諦めろと指導する。これはスポーツする権利を奪っているのか？

A: この場合は権利の侵害にはなりません。学校の体育館は授業だけを想定して作られているため、その基準が部活動に不適合な場合が多く見られます。基準の見直しが必要ですが、なかなか進みません。

(記録: 河合学)

シンポジウム

シンポジウムは黒川貞夫・田中博史氏の司会により進められました。テーマは「次世代選手の育成」ということで、シンポジストには、バレーボールに関してはオンコートレクチャーで小学生のバレーボール指導を実演して下さった川田公仁氏、そして現在若手スポーツ選手の育成システムが最も充実しているサッカーに関しては大橋二郎氏に講演をしていただきました。

次世代選手の育成 (Part 1)

川田 公仁

(つくば国際大学)

児童期に果たすべき役割を、三つの柱としてまとめました。一つ目は「底辺のバレーボール人口を増やす」、二つ目が「バレーボールに夢中になる子供たちを作る」、そして三つ目が「将来につながる基本を身につけさせる」ということです。このことを踏まえながら具体的な行動を起こしていくことが重要であろうと思います。

現在「バレーボールをやってみよう」という子供たちに対し、その受け皿となっているのはクラブチーム(スポーツ少年団等)の存在です。バレーボール人口を増やし、将来の競技者へとつなげていくためにも、積極的にクラブチーム作りを進めていかなければならないと感じています。

また、学校体育を無視してバレーボール人口を増やすことは困難でしょう。しかし、ソフトバレーボールとして体



育教材への復活を果たしたものの、「やはり小学生には難しい」という声も絶えません。

そこで、種々の問題を解決し、体育教材として積極的に扱ってもらうために『バレーボール検定』の実施をお勧めします。私が指導しているチームでは、独自に作ったバレーボール検定を年に2回、9月と3月に実施しています。6級から三段まで、それぞれにいくつかの項目があり、その項目をクリアするとハンコを押します。子供たちはハンコが欲しくて一生懸命に頑張ります。

検定の実施により得られるメリットとして、1)「できた」という成果がわかりやすく達成感を得やすい、2) 検定自体が目的となり、無理にゲームをする必要がなくなる、3) 自分ひとりでも取り組める項目が多く、普段からボールに触れるきっかけとなる、4) 技術向上につながり、その後のゲームに親しみやすくなる、5) 先生も扱いやすい、ということがあげられます。意識調査を行っても、大会日と同じように検定日も楽しみにしているという結果から、積極的に用いてもいいのではないのでしょうか。その結果、バレーボールに興味を持つ子供たちが増えてくるものと信じています。

次に、指導者の意識に焦点を当てますが、指導者としての自分に常日頃から自問自答していることがあります。それは「子供たちはバレーボールを楽しんでいるか」「自分の生活からバレーボールがなくなるのはいやだと言ってくれるか」ということです。

では、子供たちにどう向き合っていけばよいのかと考えたとき、やはり有能感を育みたいというところに行きつきます。つまり、目標値を設定したり、バレーボール検定を行うなどして、「できた」という成功場面を数多く作り出すこと、そして指導者も一緒になって「よくできたね」と意識づけを強くしてあげることが大切だと感じています。その結果「やればできる」という気持ちを持ってくれるようです。

その他、褒める場面を多く作ってあげることも大切だと思います。例えば、「何ができていないのか」をまず理解させ、その後、問題解決のために行動を起こした場合に褒

バレーボール検定 2000.3改訂

[なまえ] 平成 年 月 日

級	No	種 目	検 印
6級	1	直上オーバーパス 10 回連続 (5級 20回同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	2	直上アンダーパス 10 回連続 (5級 20回同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	3	壁打ちスパイク 3 回連続 ※壁もどりに1回 (3級 10回同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	4	3歩助走スパイク動作 5 回連続	検定員=コーチ
5級	1	直上オーバーパス 20 回連続 (6級 10回同時に)	(下級で済み)
	2	直上アンダーパス 20 回連続 (6級 10回同時に)	(下級で済み)
	3	オーバーアンダー交互 12 回連続 (4級 20回同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	4	片手直上パス左右交互 12 回連続 (4級 20回同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
4級	1	オーバーアンダー交互 20 回連続 (5級 12回同時に)	(下級で済み)
	2	片手直上パス左右交互 20 回連続 (5級 12回同時に)	(下級で済み)
	3	1歩助走ジャンプ最高点ボール キャッチ	検定員=コーチ
	4	サーブ 2 本連続 (3級 5本 & 1級 10本同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
3級	1	サーブ 5 本連続 (4級 2本 & 1級 10本同時に)	(下級で済み)
	2	壁打ちスパイク 10 回連続 ※壁もどりに1回 (6級 3回同時に)	(下級で済み)
	3	壁打ちオーバーパス 20 回連続	検定員=指名者かコーチ 回数
	4	壁打ちアンダーパス 20 回連続	検定員=指名者かコーチ 回数
2級	1	2歩助走ジャンプ最高点ボール キャッチ	検定員=コーチ
	2	バウンドパスキャッチ 3 回	検定員=指名者かコーチ 回数
	3	高さのある直上オーバーパス 10 回 連続	検定員=コーチ 回数
	4	高さのある直上アンダーパス 10 回 連続【時間制】	検定員=コーチ(時間計測) 回数
1級	1	対人オーバーパス 10 往復連続 (初段 20往復同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	2	対人アンダーパス 10 往復連続 (初段 20往復同時に)	検定員=指名者かコーチ 回数
	3	サーブ 10 本連続 (4級 2本 & 3級 5本同時に)	(下級で済み)
	4	スパイクスイング 8mバウンド ネット越え	検定員=指名者かコーチ
初段	1	対人オーバーパス 20 往復連続 (1級 10往復同時に)	(下級で済み)
	2	対人アンダーパス 20 往復連続 (1級 10往復同時に)	(下級で済み)
	3	対人反転オーバーパス 5 往復連続	検定員=指名者かコーチ 回数
	4	対人反転アンダーパス 5 往復連続	検定員=指名者かコーチ 回数
	5	正しい助走とジャンプでフェイント	検定員=コーチ

二段	1	正しい助走とジャンプでスパイク	検定員=コーチ
	2	対人ジャンプオーバーパス 10 往復連続	検定員=指名者かコーチ 回数
	3	対人レシーブ落ちるまでに7回返球 (レシーブのみ検定)	検定員=指名者かコーチ 回数
	4	ローリングレシーブ 2 回連続	検定員=コーチ
三段	1	対人レシーブ 7 回連続返球 (レシーブのみ検定)	検定員=指名者かコーチ 回数
	2	スライディングレシーブ 1 回	検定員=コーチ
特検		座位開脚 - 前屈頭部床つけ (段級に関係しない)	検定員=指名者かコーチ

※「4人組」の班編成(上級生の中から指名する検定員=指名者を含む)

※「トライ回数」は原則「2回」(時間があれば増やす)

めるようにします。すると結構褒める場面は多いものです。このとき問題解決はされていなくても構いません。褒められることによって、さらに行動を起して活発になっていきます。しかし、やることがわかっているのに行動を起こさない子とはとことん叱ります。

試合については、勝つことを目標にしても、勝ち負けの結果で評価しないことです。優勝チーム以外は負けて終わるので、負けたことを責めて終わらないことです。「○○が原因で負けた」で話を終えるのではなく、「じゃあ、○ができたなら勝てるのでは」と明るい未来を想像させて、次への問題解決行動へとつなげていくことが大切だと思います。試合後の意識づけは、子供たちの行動を変えやすい傾向にあります。子供たち自身が「私たちはこうすればいいんだ」という気持ちを行動に移していけるようにする、つまりバレーボールに夢中になっていく子供たちを作る、このことが指導者の夢であり目標でありたいと考えています。

さらに有能感を育むために、「主人公としての意識付け」を行なっています。テレビで見ている主人公は、どんな条件を持ち備えているのかを理解させ、「あなたが主人公なら、どう振る舞うべきか」を問いかけます。特に困難にぶつかったときなどは、効果を発揮しますので、指導者が主人公を演出してあげてもいいのではないのでしょうか。

最後に、基本動作の習得について指導現場の立場から、要望を述べさせていただきます。小学校の指導者の中には競技経験がない方もたくさんいらっしゃいます。また、経験はあっても変な癖をつけているのではないかと、日ごろ熱心に指導はしているがなかなか伸びないなど様々な悩みがあります。色々な指導方法を勉強し、多くの練習方法を持っていたとしても、私も含めて指導者は、どの方向に向かっているかという到達目標を認識できているのでしょうか。

そこで指導現場からの要望として、シニアトップ選手に求められる基本動作、シニアトップの指導者が求める基本動作をビデオ映像で入手できればと考えています。練習を

していく中で「最終的にはこんな形が理想です」というような画像があれば、バレーボール経験のない指導者でも、向かうべき方向がはっきりとして、指導がやりやすくなるのではないのでしょうか。

最初に述べた児童期に果たすべき役割を常に踏まえながら子供たちに接していくことが、ひいては次世代の選手の育成、バレーボールが大好きな、自立した選手の育成につながっていくものと考えています。小学校の指導者が、子供たちが夢中になる姿を見たいという思いで取り組みれば、バレーボール人口がさらに増え、底辺を支えていくことは間違いないでしょう。

次世代選手の育成 (Part 2)

大橋 二郎

(大東文化大学、フットボール学会会長)

サッカーにおける選手育成の取り組みということでは、トレセン、Jリーグ・アカデミー、JFA アカデミーの取り組みが、今日のテーマに即しているかと思えます。

まずトレセンについてですが、これは中央に選手たちを集めてトレーニングをするというシステムです。このシステムはかなり有効に機能しています。まず、地域レベルでのトレセンがあります。その上に県レベルのトレセンがあり、次に日本を9地域に分けた地域トレセンがあります。それからナショナルトレセン、というように段階的に選手を選抜していくシステムです。

トレセンの場では試合も行いますが、子供たちを集めてトレーニングをすることがメインになります。トレセンの目的は、その場でいい選手を発掘することです。かつて、サッカーは少年団での活動がメインでしたが、最近ではJリーグのチームが、下部組織としてユースやジュニアユースのチームを持つようになってきました。今、各年代で代表として選ばれる選手たちはJリーグの下部組織から上がってくる選手がほとんどです。

Jリーグ・アカデミーという組織の発足、活動は2002年から始まっています。その他にJリーグ・キャリア・サポート・センターという組織もあります。これも目立たない活動ですが、Jリーグの選手たちの再就職、セカンド・キャリアをサポートしようという活動です。アカデミーは小さい子供を育てようというシステムで、キャリア・サポート・センターはJリーグ選手としての活動が終わった後でも、れっきとした社会人として働けるようにフォローしようというものです。この二つの活動は、社会的に育成や強化を考える上で非常に重要なところではないかと考えています。

Jリーグ百年構想というものがあり、その中のムーブメントのひとつにJリーグ・アカデミーがあります。トッ

プチームの選手たちが活動している場の周りにジュニア、ユースの選手達が集まって活動するという、普及・育成に関する取り組みです。この取り組みの目標の一つが、スポーツ・遊びを通じて子供たちに運動することの楽しさを伝えたいということです。さらに、スポーツを通して日本をより健康的で生きがいのある社会にしたいという目標もあります。その目標達成のために、サッカーを一つの材料として使いましょう、ということです。子供たちを健全に順調に育てようということが第一です。サッカー、サッカーというのではなく、子供たちを育てるのに、スポーツがとてもよい役割を果たすということです。今は、子供たちを育てることを学校ばかりに任せてはられない時代で、やはり地域で子供たちを育てる、人間を育てるということが大事になってきていると思います。スポーツの教育的側面を生かしましょう、というのがJリーグ・アカデミーの取り組みです。そして今、Jリーグ・アカデミーのチームはだんだん増えてきています。Jリーグ・アカデミーの活動は始まったばかりですが、理念も理解しやすいし、社会貢献という意味でもよいのではないかと思います。

<Jリーグ・アカデミーの紹介 DVD 上映>

次に、JFA アカデミーについてお話します。これは2006年4月に福島にできました。

JFA アカデミーは中央 (JFA: 日本サッカー協会) が選手を集めて教育するという、いわばセントラル方式のアカデミーです。先ほどのJリーグ・アカデミーは地域のJリーグチームのアカデミーですので、地域密着型です。

開校目前の2006年4月に、JFA アカデミーに関してJFA 専務理事の田嶋幸三さんのコメントが新聞掲載されています。そこには「選手の育成」という言葉が使われていますが、ここでの育成という言葉は強化のための育成、という意味合いです。フィジカル面のテストと筆記試験の入学試験があります。そして選抜された子たちは寮に入り、近くにある学校に通います。このような、学校つきの強化・育成プログラムがスタートしました。最近ではエリートとかエリート教育という言葉を使いませんが、JFA アカデミーではエリート教育をしようとして謳っています。JFA アカデミーは、フランスの育成・強化の方式をモデルにしたものです。フランスはこの方式で成功しました。ワールドカップでの優勝という、非常にわかりやすい形での成功を収めました。それには20年かかっています。しかし海外の国々が全てこういう方式でやっているわけではなく、どちらかといえば地域のクラブチーム主体でやっている国のほうが多いです。

現在、サッカーにおける選手育成の場について言えば、学校のクラブ、地域のクラブ、Jリーグのクラブ、そしてJFA アカデミーがあります。子供たちはいろいろなところでサッカーをやっている、ということです。そこからトップを目指そうというときには、それぞれの年代の中で、トレセン・システムで頑張っていく、ということになります。

ここで問題点をひとつあげてみます。

どうしてもチームが勝ちたがる、ということです。これは当たり前なのですが、それが進んでいくと、弱いチームは相手にされない、チームの中であまり活躍できない子は去っていく、ということが起こります。そして、いわゆる落ちこぼれてしまった子たちがそのスポーツをやる場所がなくなってしまうということが起こってしまいます。広い土地や場所があっても、指導者・組織というものがないと、スポーツを続けていくのは難しいです。特にサッカーやバレーボールは一人ではできないので、そういう子たちには気の毒な状況かなと思います。日本では、あまり上手でない子たちがスポーツをやる場所がなくなってしまうかねない状況にあり、それはなんとかしなくてはいけない課題であろうと思います。

< 1995年強化プログラムのビデオ上映 >

なぜ、この映像を見ていただいたかという、この中に高原選手、稲本選手、小野選手という、海外で活躍している選手が3人いるのです。少ない人数の中から、そういう選手が3人出たということは重要なことだと思います。海外で活躍できるような選手をどうやったら上手に育成できるかというヒントが、この年の強化プログラムにあるのではないかとことです。これに関してはサポート体制の整備というのがキーワードになるかと思います。この時はメンタル・カウンセラー、栄養士など、スタッフをかなり充実させました。そして、そのスタッフは何をしたかという、『教育』です。選手に教育をし、いろいろなことを覚えさせたということです。

自立した選手を育てることが最も大事なことです。そしてそれは高校時代にできるのではないかと考えています。この前、井原正己氏（元日本代表主将）と話したのですが、今の選手は大人しくて、みな同じようなタイプが多く、自分たちでやろう、という部分が少ないのではないかと言っていました。そのあたりは見直す必要があるの

ではないかと思います。組織やシステムがよくても、内容がやはり大事だと思います。そして、タレントは結構いるのではないかと思います。それをうまく見つけて、人間として自立できるような育成ができれば、それがトップの育成にも通じていくのではないかと思います。

Q1：将来につながる基本、というのはスキルの部分だけではなく、心の部分も重要だと思うがどうか。また、バレーボール検定はスキルがメインか？

A：川田氏

心理的な部分は「バレーボールに夢中な子供たちを作る」というところに含まれます。バレーボールが好きにならないことには将来にもつながらないだろうということで、気持ちと技術を分けて表現しました。

私が指導しているチームでのバレーボール検定は、スキルだけです。検定項目をクリアしたところでゲームをやってみたら、ラリーが続くようになっていくことが多いので、検定だけを別個にやってもいいのではないかと思います。

Q2：指導者の中での「勝利」の位置づけはどのようなところにあればよいと考えるか。

A：大橋氏

代表監督やJリーグの監督は当然、勝つという結果を求められるわけですが、育成年代の指導者に対して求められるのは一人ひとりの子供の成長をよく見てもらいたいということです。チームで勝つのがサッカーです。勝てば嬉しいに決まっていますし、負ければ悔しいんです。ところが、親とコーチが一番勝ちたがっているというチームもあります。やはり、子供たち一人ひとりの成長を見ていくというのが一番でしょう。

(記録：水澤克子)

